

日本育種学会の2016年度学会賞に、道立総合研究機構十勝農業試験場（芽室町）の豆類グループが育成した大豆の品種「ユキホマレ」の取り組みが選ばれた。ユキホマレは早熟で機械収穫に適し、安定した収量・品質を残すのが特徴。道産大豆の生産、供給に貢献したことが高く評価された。

ユキホマレと改良品種育成

学会賞は、会員の優れた学術的、技術的な業績に対して、毎年度3件以内で選んでいる。十勝農試の受賞は、トウモロコシ育種グループの「ハイゲンワセ」などの育成（1985年度）、小豆育種グループのエリモショウズなどの育成（98年度）に次いで3回目になった。

今回受賞したテーマは「複合障害抵抗性と機械収穫に優れた大豆品種『ユキホマレ』とその改良品種群の育成」。十勝農試が品種改良し、2001年に品種登録されたユキホマレと、その改良品種「ユキホマレR」、「とよみづき」の育成という一連の取り組みが対象になった。

道産大豆生産・供給に貢献

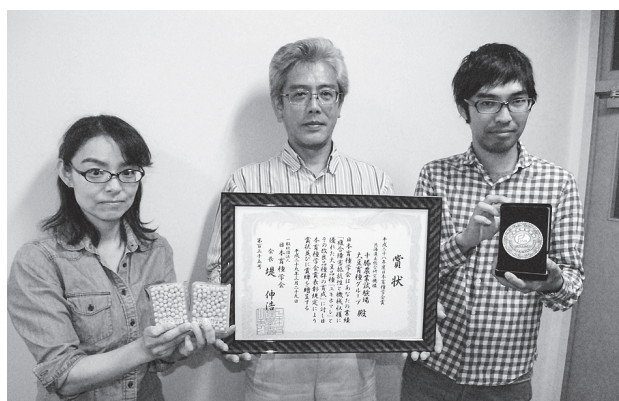
ユキホマレは、早熟で耐冷性や低温着色抵抗性、ダイズシストセンチュウ（SCN）抵抗性といった複数の抵抗性を持ち、コンバインによる収穫が可能。食用大豆の増産が求められた中、課題だった省力化や原料の大ロット化に対応する品種として生まれた。

1990年、SCN抵抗性で機械収穫に向けた「十系783号」を母に、早生でSCN抵抗性の「十系780号」を父に人工交配をスタート。その交雑後代から、寒冷な北見での選抜を行うなどして育成した。選抜した個体数は約40万。交配開始から26年、研究員15人が携わって誕生した。同グループの鈴木千賀研究主査は「十勝農試が引き継いできた良い特性の親（品種）があってこそ生まれた。長年の積み重ねだと思う」と話す。

甘みはあるものの軟らかくて豆腐に使いにくい課題があったが、加工技術の進歩で克服されてくると需要も拡大。農家の生産意欲も高まり、作付面積は増えた。15年産では全道で約1万4000ヘクタールで栽培され、道産大豆の約4割を占めた。全国でも関東以西で主力の「フクユタカ」に次ぐ生産量に成長している。

十勝農試ではさらに、ユキホマレを基にDNAマーカー選抜を使ったSCN抵抗性の「ユキホマレR」、豆腐加工に適した「とよみづき」といった改良群の育成にも成功した。

同グループの三好智明研究主幹は「受賞には作付面積も重要な要件で、栽培法の技術も普及する上で大きかった。育成にかかわった先輩方に感謝している」と受賞の喜びを話した。



ユキホマレと改良品種群の育成に携わった鈴木さん、三好さん、山口直矢さん（左から）

道は2016年度の農業用全地球測位システム（GPS）ガイダンスシステムの出荷状況をまとめた。国内主要メーカー8社が全国に出荷した台数は2070台で、道内向けには1650台。08年からの累計台数は8590台となり、道内向けは7000台を突破、全体の81%を占めた。

道は農業の担い手減少や高齢化に対応するため、ロボット技術やICT（情報通信技術）を活用したスマート農業の取り組みを進めており、十勝はその先進地になっている。

主要メーカーは井関農機やクボタ、日本ニューホラン

ドなど。GPSガイダンスシステムはGPSによりトラクターの位置をリアルタイムにモニターに表示し、農作業を行う際の走行経路をガイドする「農作業用カーナビ」。

道内向けの同システム出荷数は、08年の100台から12年には2340台に伸び、16年度は3倍の急伸長をみせている。

一方、トラクターなどを自動運転する自動操舵（そうだ）装置の出荷数は16年度全国1310台のうち道内は1220台と圧倒的なシェアを誇った。累計台数では12年度240台から10倍以上の2840台に伸びており、道は「スマート農業施策の成果が表れてきている」とみている。